

わたしたちの郷土・研究

水戸八景

～ 漢詩を通して現地を巡る ～

茨城大学教育学部附属小学校

6年1組

酒井紗綾

1・研究のきっかけ

私は今まで「わたしたちの郷土」研究で、二代目水戸藩主・徳川光圀に招へいされた明の学者・朱舜水やその教え子であった覚さんこと安積澹泊について研究してきました。そして昔の学のある日本人たちは、漢文をスラスラ読んだり書いたりすることができるのだと知りました。この時代の優秀な殿さまや武士たちは儒学の教えを通して書物を読み書きし、漢字の意味やその背景にある思想や文化を習得していたのだと知りました。

私は毎日、学校に行くときに弘道館の前を通ります。その弘道館を創設したのは九代目水戸藩主・徳川斉昭です。斉昭が積極的に水戸藩の政治を改革し、藩校や庭園を創り、また文化や芸術に対しても非常に長けていた人だったということ、今までの自分の研究で知りました。

そんな時、那珂湊にある「水門帰帆(みなとのきはん)」という場所に行き、そこが斉昭の選定した水戸八景の内の一つだということを知りました。眼下に広い水平線が続き、遠くに筑波山が見えるすばらしい場所でした。

斉昭がその場所に碑を建てていたことだけではなく、「水戸八景」という漢詩を作っていることも知りました。すべて漢字で書かれていますが、一行に一カ所ずつ、水戸藩内の選ばれたすばらしい場所が詠われています。実際にその場所には斉昭の特徴ある漢字で彫られた石碑が置かれており、その合計八か所を私は調べて巡ってみることにしました。

2・研究のすすめ方

- ・「水戸八景」について書籍やインターネットで下調べをする。
(書籍は主に図書館の郷土資料コーナーを利用する)
- ・漢文と漢詩を勉強する。小学生向けに書かれた入門書と参考書を利用する。
- ・「水戸八景」の現地に行き、調査。
- ・参考のため、斉昭の筆跡の資料を見て回る。
また夏休み向けの企画などに参加する。(弘道館・偕楽園などを中心に)

3・研究したこと

① 漢詩について

はじめに徳川斉昭が作った漢詩「水戸八景」を読みたいと思います。

水戸八景

雪時嘗賞仙湖景

雨夜更遊青柳頭

山寺晚鐘響幽壑

太田落雁渡芳洲

霞光爛漫岩船夕

月色玲瓏廣浦秋

遙望村松晴嵐後

水門帰帆映高樓

まず、漢詩を解説します。

漢字のみの詩を日本語のように読めるようにした文章を「書き下し文」と言います。

水戸八景

雪時嘗て賞す仙湖の景

雨夜更に遊ぶ青柳の頭

山寺晚鐘幽壑に響き

太田の落雁芳洲を渡る

霞光爛漫たり岩船の夕

月色玲瓏たり廣浦の秋

遙に望む村松晴嵐の後

水門帰帆高樓に映ず

漢詩を読む工夫として日本人は返り点と呼ばれる「一・二点」や「レ点」、「上・下点」などを付けて、日本語の順序になるような書き下し文にしたそうです。これは他に漢詩や漢文をたしなんでいた朝鮮やベトナムにはない技法で、面白いなと思いました。明治時代まで日本では、単に「詩」と言えば漢詩のことを指していて、和歌のことは「歌」と呼んでいたそうです。現代でも中学校の国語では漢文の授業があり、書き下し文の技法が学べるそうです。

書き下し文で漢詩を読むと、響きがすばらしく雄大な気持ちになります。

参考文献を使って、自分で訳してみました。

水戸八景

雪の日は味わい深く眺める千波湖の景色
 雨の夜、青柳の渡しは更に趣きが深い
 夕刻、山寺の鐘が深い谷に響いて渡る
 連なつた雁の群れが
 太田の豊かな大地に降りてくる
 茜色に辺り一面が染まる岩船の夕暮れ
 月の光が麗しく水面に映る秋の広浦
 遙か遠くまで村松に
 晴れた日の霞がたちこめている
 湊に戻る帆船の光が
 高い楼閣に反射している

漢詩「水戸八景」は一行につき七つの漢字で八行書かれています。このスタイルは「七言律詩」と言います。七言律詩は二・四・六・八行で韻を踏んでいます。ここでは「頭」「洲」「秋」「樓」の字です。

②八景について

水戸八景の場所とその美しいとされる季節や時刻の組み合わせにもある決まりがありました。美しい場所を八つ「八景」として選ぶ習わしには、モデルとなった中国の「瀟湘八景」があります。それぞれ

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 帰 晴 秋 夕 落 晩 夜 暮
 帆 嵐 月 照 雁 鐘 雨 雪

〇〇の暮雪、〇〇の夜雨、〇〇の晩鐘、〇〇の落雁、〇〇の夕照、〇〇の秋月、〇〇の晴嵐、
〇〇の帰帆

というふうに、パターンがあります。

江戸時代には多くの場所から様々な階層での八景選びが流行したそうです。日本では室町時代の終わりごろに有名な近江八景が選ばれ、その後、斉昭が水戸八景を選ぶ前からも水戸藩内や常総地方で多くの八景選びが行われました。また、斉昭が水戸八景を選定した後はそれが影響して、更に多くの八景選びが流行ったそうです。そのような理由で、茨城県には「〇〇八景」と呼ばれる箇所がとても多いのだそうです。

この漢字四文字で「〇〇暮雪」と言うふうに記された石碑が、それぞれ水戸八景の八か所に置かれています。石碑に刻まれている字はすべて斉昭のすばらしい筆跡です。

この石碑と選ばれた場所を見て確かめるために、さっそく水戸八景を巡ってみました。

③現地調査

一 雪時嘗て賞す仙湖の景 「仙湖暮雪」



仙湖とは千波湖のことで、この碑は現在、借楽園の千波湖へ面した斜面の上に建っています。

水戸八景の石碑に刻まれている斉昭の字は斉昭が得意とした隷書体という書体で書かれています。装飾的な要素が加わり斉昭の書く隷書体は「水戸八分」と呼ばれています。斉昭は漢字の知識がたいへん深く、同じ一文字に対して古典的な漢字、装飾的な漢字、と自在に使い分けていたようです。たとえば弘道館記のようなほかの有名な自筆漢文でもその多様性を見ることができるそうです。

仙湖暮雪では「暮」の字が古典的な漢字「莫」になっています。

千波湖は江戸時代、今の三倍の広さで水戸駅の辺りまで湖だったので、とても広々とした眺めだったのではないかと思います。雪がすべてのものを隠し、静かで雄大な雪景色が広がっていたのかもしれませんが。

そしてこの水戸八景について斉昭はまたそれぞれ歌（和歌）でも美しさを表しているのです。「千重の波 よりてはつづく山々を こすかとぞ見る 雪の夕ぐれ」

詩だけではなく、歌でも詠みなおしている斉昭の姿に感動してしまいました。

二 雨夜更に遊ぶ青柳の頭 「青柳夜雨」



万代橋のほとりに大きな柳の木があります。その木の根元に丸くぼってりとした石碑が建っています。青柳と夜雨が二行に渡って刻まれています。「夜」の字が「夜」という字で書かれています。

昔、この場所には橋がなく、船の渡し場があったそうです。また川岸に柳の木が並んでいたようです。しとしと雨が降る中、あんどんやちょうちんのわずかな灯がポッと見える渡し場の景色を想像しました。

詠まれた和歌は
「夜さめに 小船くだせば
夏陰の柳をわたる 風のすずしさ」

三 山寺の晩鐘幽壑に響き 「山寺晩鐘」

常陸太田市稲木にあります。かなり山の中でした。現在、西山研修所があり、碑が建つところは四方、木々に囲まれています。かつては光圀ゆかりの久昌寺の檀林がここにあり、多くの学僧が修行をしていた場所だそうです。景色というよりも多くの若い僧たちが静かに修行に励む夕刻に、



山の中を深くやわらかくお寺の鐘が響く様子を選定したのではないかと思います。
「山」の字が「山」と記されています。

「つくづくと 聞くにつけても 山寺の 霜夜の鐘の音ぞ淋しき」

四 太田の落雁芳洲を渡る 「太田落雁」



常陸太田市栄町にあります。昔ながらの商店街の脇に人ひとりが通れるような細い道を下ってゆくと、整備された場所に石碑があります。眼下には太田の街が広がり、遠くには連なった山が見渡せます。太田は石の産地で寒水石と呼ばれる大理石を採掘しています。水戸八景碑に使われている石も常陸太田の山から切り出された上質な石です。昔は山の前は一面が田畑だったそうです。

落雁というのは雁の群れが降下することを指しているようですが、残念ながら私は雁の群れを実際に見たことがありません。5年生の国語の授業で「大造じいさんとガン」を勉強して以来、いつか見たいと思っています。昔は当たり前の景色だったそうです。

「太」の字が「犬」の字で記されています。

「さして行く 越路の雁の越えかねて 太田の面にしばしやすらふ」

五 霞光爛漫たり 岩船の夕べ 「巖船夕照」

大洗町祝町、かんぽの宿の近くにあります。人の気配のない林の中を下ってゆくと、突然目の前が開けます。そこに巖船夕照の碑があります。眼下には涸沼川と那珂川の合流地点が見え、うっそうとした林を背に川と町と海のパノラマを見ることができます。昔はこんなに木が覆い茂った所ではなかったのではないかと考えています。茜色に染



まる夕方に来たかったのですが、神隠しに遭いそうな入り口なのでどうしてもできませんでした。「夕」の字が「夕」と記されています。

「筑波山 あなたはくれて 岩船に 日影ぞ残る 岸のもみぢ葉」

六 月色玲瓏たり広浦の秋 「広浦秋月」



茨城町下石崎、溜沼のほとりに縦長の石碑が建っています。溜沼湖畔にはかつてすばらしい松の木がたくさん生えていたそうです。

溜沼のようなとても大きな湖に行くと新鮮な気持ちになります。海や川と違って、独特の静けさがあるからです。秋の月明かりで対岸まで見渡せるほど、澄んだ夜の空気を感じることができます。

「月」の字が「月」と記されています。

「大空の かげをうつしてひろ浦の
なみ間をわたる 月ぞさやけき」

七 遥かに望む村松晴嵐の後 「村松晴嵐」

東海村村松にあります。歴史ある村松虚空蔵堂(お寺)と村松大神宮(神社)の合間を抜けると、松林の中に石碑があります。

石碑はまるく、つるつるしていて、八景碑の中で私の一番お気に入りの石です。ここはかつて砂丘が続き、砂防対策として大正時代から昭和にかけて松の木をたくさん植えたそうです。今は松の木や原子力機構のフェンスで海は見えませんが、足元には白い砂が広がっていました。



もしかしたら晴嵐というのは、巻き上がる白い砂嵐を霞に見立ててのことではないかなと思いました。「村」の字が「砂」^ハと記されています。

「真砂地に 雪の波かと見るまでに 塩霧はれて 吹く嵐かな」

八 水門の帰帆高樓に映ず

「水門帰帆」



ひたちなか市和田町、海に面した高台に石碑があります。「帆」の字が「帆」と記されています。目の前に広がる太平洋、沖にさんふらわあ号が苫小牧に向かって進むのが見えます。南の方を見ると、湊公園の緑色の高台の合間からちょこんと筑波山が見えます。この湊公園のあった場所にはかつて「い寶閣」という水戸藩の御殿があり、「高樓」というのは「い寶閣」のことを指しているのだと思いました。

八景碑の横には後から置かれた碑がいくつもあり、ここは地元の人たちにとっても大切にされている場所なのだとわかります。私は水戸八景の中で一番この場所が落ち着きます。

斉昭にとって、那珂湊は美しい景観や、運輸や漁業で賑わいをもたらす場所であったのと同時に、度々現れる外国船へ対しての海防の地でもありました。幕末の情勢の中、常に太平洋へ目を光らせていたのだと思います。

「雲のさかひ しられぬ沖に真帆上げて みなとの方に よするつり舟」

4・研究して分かったこと

これで水戸八景を巡りました。

私はなぜ徳川斉昭が水戸八景を選び、漢詩や和歌を詠んだのか考えました。私は実際に漢詩を味わい、その地を巡ることによって、八景選びが斉昭にとって単に雅な流行やたしなみの領域ではなく、自分の治める水戸の地を慈しみ、大切に思っていたからこそ生み出されたものではないかと考えるようになりました。

八景の選定は斉昭が直接その地を見て選んだのではなく、いくつか提出された案の中から選んで決定したとの説があります。八景選定を藩の文化事業と考えるのなら、その選び方が藩主として妥当で合理的だと思いました。湖、川、山、田、海と藩内広域にわたってバランスよく選ばれているからです。また、若い侍たちに八景を一日で巡らせ足腰を鍛えさせたとの説もありますが、私はその説には疑問が残ります。現在では六市町村をまたいでいる八景は、車で巡っても遠いと感じたほどだからです。それは恐らく後からつけられた願望ではないかと思いました。

これらの印象から、斉昭が藩の景勝地を選び、詩や歌に詠み、自筆で書き収めた石碑をその場所に建てることによって、藩主として藩を治める行政の政策の中に、文化的芸術的なセンスと精神を組み込んで体現化させたのではないかと思いました。それは『一張一弛』の精神で藩校・弘道館と庭園・借楽園を水戸の地に創設させた事からもうかがい知ることができるからです。天下に先駆け、数々の事業や改革をなした徳川斉昭。漢詩を通して様々なことを発見することができました。

最後に水戸八景にならい、替え詩にして「私の水戸八景」を詠みたいと思います。

海門 帰帆 高橋 に映ず	遥か に望む ネモ フィラ 噴嵐 の後	月玲 瓏たり 阿字 ヶ浦の 秋	霞光 爛漫 たり 七ッ洞 の夕	田の 落雁 常磐 線を 渡る	芸術 館の 晩鐘 街に 響き	雨夜 更に 遊ぶ 銀杏 の坂	雪時 嘗て 賞す 見和 の景	紗綾 の水 戸八 景
海門 帰帆 映高 橋	遥望 青花 噴嵐 後	月玲 瓏阿 字浦 秋	霞光 爛漫 七洞 夕	田落 雁渡 常磐 線	芸術 館晩 鐘響 街	雨夜 更遊 銀杏 坂	雪時 嘗賞 見和 景	紗綾 ノ水 戸八 景

主な参考文献：「史跡めぐり水戸八景碑」但野正弘著 錦正社 1997年・「水戸八景」堀口友一著 崙書房出版 1991年・「茨城の文学碑」室伏勇著 暁印書館 1979年・「絵で見てわかるはじめての漢文；一巻 漢文入門 / 二巻 漢詩」加藤徹監修 学研 2014年